

# 令和8年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 学ぶことを楽しみ人とつながって心豊かに生きる  
つつじっ子の育成

## 目指す子どもの姿 自ら、考えを「つなぐ」「活かす」「広げる」子どもの育成

変容を目指す資質・能力 a 知識及び技能 b 思考力、判断力、表現力等 c 学びにむかう力、人間性等 d 情報活用能力  
e 課題解決能力 f 学び続ける姿勢 g コミュニケーション能力

三田市立つつじが丘小学校  
学校長 山本 司  
研究主体【 学力向上部 】

前年度		継続性	4月		2～3月 年度末評価			
学力向上に向けた 重点的な目標	年度末評価 (前年度の成果と次年度に向けた課題等)		評価	学力向上に向けた重点的な目標 (変容を目指す資質・能力)	成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	教員 点検	(今年度の成果と来年度に向けた課題等)
・言語力を高め、情意面を育む読書活動の充実(a・c・g)	○学校図書や担任との連携で年間を通しての読書活動への取り組みが深まった。ブックシェアラウンジをオンラインベースに新設し、教師や図書委員会からのおすすめの本を多く出したことで、本の出会いの機会が増え、読書への意欲付けにつながった。また、朝の読書タイムや図書ボランティアによる読み聞かせなどの継続した取り組みによって、短時間であっても図書室に足を運び、本に触れようとする児童の姿が見られた。 ○読書習慣を身に付けるために「家庭読書の日」を設けたことで、高学年も月に1回必ず本に触れ合える機会が確保できた。 ●「家庭読書の日」を形骸化しないために「読む」だけでなく、読んだ本の感想や紹介文を書かせるところまでをセットにして宿題に出すなどの工夫が必要である。 ●読書通帳で100冊達成した児童は、54名と昨年度と比べて同程度である。 ●学年が上がるにつれて読書時間が確保できず、本離れが目立つ点がある。読書の時間がない分、毎週1回本を借りる日を設定するなど、本に触れ合う機会を確保する。	B	・言語力を高め、情意面を育む読書活動の充実(a・c・g)	①毎日の読書時間を昨年より増やす。 (1・2年15分以上、3年以上30分以上の児童が30%) ②読書通帳で100冊達成する児童を昨年度より増やす。 ③読書環境を整え、学級文庫やブックシェアラウンジの充実を図る。 ④図書委員会の活動を通して全校生への読書推進を行い、自主的諸活動を充実させる。	・朝の読書タイムを活用して読書習慣を確立させ、本に親しむ機会を増やす。 ・学校図書を中心に、本の選び方指導や本の読み聞かせ、図書館借りの発行などを通して読書の楽しさを伝える。 ・「読書通帳」を活用して読書の質・量とともに増やし、数多く読書をした児童を表彰することによって、読書を一層奨励する。 ・図書室や学年フロア・ブックシェアラウンジなど、本に親しめる環境を整備し、読書の楽しさを一層味わえるようにする。 ・図書委員会の活動の一環としてスタンブラリーや本に関するクイズなどを実施し、全校生が図書室に来たり、読書を楽しんだりする機会を設ける。			
・言葉で書き表す力の伸長(a・b)	○国語の学習では文章構成を理解して教科文を読み取り、そこから想像したことや、新たに得た自分の考えを書かせることを大切にしていた。書くことが苦手な児童もある程度、型を示したり、ペアークなどで自分の考えを口に出して整理したりすることで、少しずつ書けるようになってきた。 ○生活科や社会科、総合など、調べたことを、新聞やパンフレット、ポスターなどさまざまな媒体に、文字情報だけでなく図や写真、図や表などを用いてわかりやすく表現しようとする意識が育ってきている。 ●読書力がなかなか増えず、普段の会話の中でも簡単な言葉で片付けてしまうことで、うまく自分の考えを伝えることができていない児童が複数いる。 ●書き表す力の伸長が、読書活動を通して表現する機会を作ってきた。 ●低学年では、ひらがなやカタカナの使い分けが不十分であったり、中高学年では、段落相互の関係や文のつながりなどを意識しながら読み取り、自分の言葉で要約する力が課題が複数あり、 ●苦手意識がある子ども安心して「書く」ことに取り組み、継続して力を付けていくことができるように、各学年に応じた「振り返りの型」を提示し、どの教科でも振り返る場を確保して学校全体で取り組む必要がある。	B	・言葉で書き表す力の伸長(a・b)	①学年の発達段階に応じた書く力の向上を図る。 ②算数の思考過程を記述する問題の平均正答率で全国平均をめざす。 ③低学年から、書いて表現する活動をどの教科でも取り入れ、書くことの日常化を図る。 ④聞く力を高め、情報を取捨選択してまとめる力を身に付ける。	・朝学習の時間等にテーマを決めて作文を書くトレーニングを続けることで、書くことへの苦手意識をなくしていく。 ・分からない言葉は、辞書ですぐに調べさせる機会を多くとり、辞書を使う習慣をつける。 ・設定された字数や目的に合わせて、情報を取捨選択し、要約する学習を重ねる。 ・書いた文章を推敲する時間を設定し、自分の文章を読み直すことを習慣化させる。 ・図表やグラフなどを用いた文章や新聞記事を活用し、それらを用いる意図や効果について理解させるとともに、説明的な文章を書く際には、図表を効果的に活用できるように指導する。			
・学習の中でICT機器を効果的に活用し、授業改善に努める(c・d・e・f)	○学習の中で学習eポータルを使って、意見を表したり、交流したりすることはどの学年でも取り組むことができた。 ○高学年ではプレゼンテーションソフトを使って資料を作成し、総合や理科社会等での調べ学習の発表に活かすことができた。 ○基礎基本の定着に向けて、ドリル学習ソフトを用いた朝学習や宿題等で基礎的な読み書きの反復練習を行うことができた。 ●ICT機器の使い方に慣れていないことが多かったり、うまく対応できないことがあったりした。校内のICT研修も充実させ、どの教員も自信を持って活用できるようにしていく。 ●学習に関係ない使い方をすると、ルールを守れていない児童がいるので、ルールの徹底や情報モラルについての指導も充実させていく必要がある。	A	・算数科を中心に「自ら、考えをつなぐ活かす 広げる～表現力を高める授業デザイン～」のテーマに沿って表現力、思考力を高める授業を目指す(a・b・c・f・g)	①各学年単元テストで「思考・判断・表現」に関する項目のクラス平均が75%以上を目指す。 ②全国学力学習状況調査の国語、算数の「思考・判断・表現」に関する項目の平均正答率で全国平均を上回る。 ③全国学力学習状況調査質問紙で「ICT機器を活用した協同学習の取り組み状況」についての肯定的な評価で70%以上を目指す。	・昨年までの研究を踏まえ、子どもが主体的に学習に取り組む授業改善に努める。 ・教育環境整備やつつじが丘小学校スタイルのノート作りを推進すると共に、相互評価を充実させる。 ・「つかむ」「考える」「広げる」「振り返る」の授業の流れの可視化を図る。 ・課題提示の仕方を工夫し、児童からめあてを引き出すことで主体的な問題解決につなげる。 ・考えを伝えあう場面を設定し、各学級で共有した「伝え技」の意識的な活用とアップデートを図る。 ・タブレット・PCなどのICT機器の効果的な活用方法について研究を進める。 ・ミライシードを活用した協働的な学習の充実、情報の整理などを学習に位置付け、思考の可視化、操作化を促す。			
・算数科を中心に「自ら、考えをつなぐ活かす 広げる～表現力を高める授業デザイン～」のテーマに沿って表現力、思考力を高める授業を目指す(a・b・c・f・g)	○算数の学習で「つかむ」「考える」「広げる」「振り返る」の授業の流れを提示し、ことある程度授業のスタンダード化を図ることができた。 ○ゲームや遊び、興味を惹きつけるような問題提示や実体験を伴うような活動を取り入れることで、児童が意欲的に課題に向かう姿が見られた。 ○全教員が授業公開し、事後研修会をもつことで、教材研究や授業づくりに役立てることができた。また、講師を招聘し、計画的な研修を持つことで授業改善につながった。 ●問題に対して自分の思いや考えをつぶやくことはできていないが、「発表する」にまつていない点が課題である。しっかりと相手意識をもって伝えようとする場を定めていく。 ●子どもの「表現力」を授業のどんな場面で育てていくかを指導者が明確に持ち、年間を通して鍛えていく必要がある。	B	・学習規律・授業規律の定着と学習環境の整備(a・c・f)	①聴き合い学び合うクラス作りを行う。 ②授業でのあいさつをはじめ、自分の思いを伝える力や主語と述語をはっきりと正しく伝えることを意識する。 ③学習の中でペアワークなど学習内容を確認する場を設定し、話す・聴くのパランスを意識して授業をコーディネートする。	・学習の準備について指導・点検を行い、定着させる。 ・「目を見て話を聴く」「反応しながら聴く」「体を止めて聴く」「手遊びをしない」など、聴く態度の徹底を図る。特に低学年では、望ましい聴き方ができている児童を褒めることで、クラス全体の聴く態度の向上につなげていく。 ・ユニバーサルデザイン化のチェックシートを学期はじめと終わりに全教室で行い、どの子にとっても学びやすい環境づくりに学校全体で取り組む。 ・がんばり学びタイム指導員による個別支援を行い、学習習慣の定着につなげる。			
・児童の家庭等での学習習慣の確立(c・f)	○全学年でタブレットを活用した宿題を定期的に出し、取り組むことが定着していった。 ●保護者アンケート、児童アンケートと「すすんで家庭学習をしている」の肯定的評価は70%以下であった。宿題をしていない児童が一定数いる。家庭とも連携をとりながら、家庭学習の習慣をつけさせ、やるべきことには徹底して取り組ませる。 ●「家庭学習の手引き」については、校区全体の取り組みとして小中一貫を目指し、連携を推進していく。また、手引き配布時に活用方法を説明し、自主学習などにも活用するように意識付けを図る。 ●家でメディアやネットワークゲームの利用方法について考える機会をもつ大切さについて、情報モラル教室などを計画的に持ち、徹底していく。	C	・児童の家庭等での学習習慣の確立(c・f)	①保護者アンケートで「すすんで家庭学習をしている」の肯定的な評価を80%以上にする。 ②児童アンケートで「すすんで家庭学習をしている」の肯定的な評価を80%以上にする。	・学習の準備について指導・点検を行い、定着させる。 ・中学校区での合同研修を実施し情報や取組等について共通理解を図る。 ・がんばり学びタイム指導員による個別支援を行い、学習習慣の定着につなげる。 ・校区全体で「ひとり学びの手引き」を配布、活用して学習習慣の確立を図る。			
・学習規律・授業規律の定着と学習環境の整備(a・c・f)	○教室の掲示物等について、学校全体で児童の集中しやすい工夫がされており「学びに向かうための環境づくり」が定着している。 ○学校全体で授業内ルールの徹底や周知を図ることができた。 ●学習の準備、時間を守ることが定着していない。必ず次の学習準備をしてから休憩することを徹底させる。 ●話しやすい雰囲気を作るために聞き手が反応をしながら聴くことを学級文化にしていく。 ●すべての児童が安心して授業に参加できるように、指導補助員、がんばり学びタイム指導員を含めた、全教職員間の情報共有をさらに深め、学習や授業のルールの定着を図る。	A	・基礎学力の定着、表現力の向上実現に向けたICT機器の効果的な活用(c・d・e・f) (新規)	①学習の中で学習eポータルを使って意見を交流することができる ②プレゼンテーション作成アプリを活用し、表現する学習活動を取り入れることで、情報活用能力を高める。 ③学習eポータルの中のドリル学習ソフトを活用し、基礎学力の定着を図る。	・発表の機会を意図的に設け、調べたことやまとめたことをグループや全体の中で伝えるなど協働学習の充実を図る。 ・タブレットなどのICT機器を用いて、児童一人ひとりの実態に合わせた学習をすすめる。履歴を残すことで、基礎基本の定着を図っていく。 ・ICT機器の活用におけるルールの徹底や情報モラルについての指導を「GIGAワークブック」などを参考にしながら充実させていく。			

○「教員点検」は教員対象に実施した自己点検調査結果(1～5の5段階評価)の平均値  
○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価  
A・・・十分に達成 B・・・おおよそ達成  
C・・・達成が不十分 D・・・ほとんど達成できず